

---

# 静かなる伝説

ラトソル・たけい

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

静かなる伝説

### 【Nコード】

N3513D

### 【作者名】

ラトソル・たけい

### 【あらすじ】

目が覚めると、そこには少年の知らない世界が広がっていた。自分为一体どこにいるか…なぜこんな世界に来てしまったのか…全く分からないまま少年の生活が始まる。そんな少年は学校に行くことになり、一人の魔法使いの少女と出会う。少女と共に過ごすことになった少年……二人の前にはあらゆる困難が立ちはだかる。一体乗り越えられるのだろうか

## ブログ（前書き）

荒らしや暴言は、お互いに悪い方向になってしまうので止めて下さい。

気が付いたことがありましたら、感想・評価でもメッセージでも指摘して頂けたら幸いです。

また、感想や応援は大きな支えとなるので、宜しかったらお願いします  
ますm（――）m

## プロローグ

暗い。ここはどこだ。

そこでは暗く大きな闇が少年を包んでいた。

「夢、なのか？」と少年が小さく呟く。

その時だった。一瞬にして世界が明るくなる。どうやら夢だったらしい。

少年が起きるとそこには見たことも無い世界が広がっていた。

「あれ？ベットに寝ていたはずなんだけど」

確かに今ベットで寝ていた。だが、それは少年が寝ていたものでは無かったのだ。

「ここはどこだ」

辺りを見回してみると机にベット、本棚とクローゼット、生活は出来るようになっていているらしい。少し考えていると、誰かがノックしてきた。

「入るわよ」

女の人の声が聞こえる。

「え、あ、どうぞ」

と少年が答える。

そこには背の高めの女性が立っていた。40代前半だろうか、黒く長い髪をなびかしている。

「今日から学校でしょ？早く支度して、ご飯食べなさい」

そう言っと、部屋から出ていった。

学校？っていいよりここはどこ？何が起こってんだ？

どれも少年を悩ませる問題だった。何も分からないまま、下へ行く事に決めた。

朝食はパンだった。案外変わらないだな、と思いながら少年は口へ運ぶ。味の事は全くと言って良いほど、今の少年には分からなかった。

「ここはどこなんですか？」と少年は重い口を開く。

「何言ってるの。熱でもあるんじゃない？」

「あ、いえ、大丈夫です」

少年が小さく答える。

「しっかりしなさいよ」

元気付けるように女性は言った。

どうやらこの女性はお母さんらしい。多分…俺の。いや、正確に言えば俺がこの世界に来る前にいた俺だ。

それに気が付いていないということは、俺は以前からここにいたという事になる。しかし、一体なぜ……

考えても、考えても答えは出なかった。なにせ何が起こったのかさえ、分からないのだから。

無理も無いだろう。とりあえずしばらくは、ここにいた事にしようとした。

それには自分の名前がわからなければ話にならない。

様々な事を考えている間に朝食の時間が終わっていた。

「ほら支度して。入学式に間に合わなくなっちゃうわよ」

と言われたので、言われるがままにした。

そして外に出ようとした時だった。

「どこに行こうとしてるの？」

と不思議そうに尋ねられた。

何か間違ったでしょうか。

「スポーツを言わなきゃダメでしょ」

スポーツ。なんですかそれは。全くわかりません。

「しっかりしてよ。もう子供じゃないんだから。私達が行く所はイルワンドでしょ」

女性はドアノブに手をかけて、何か呪文のようなものを唱えた。

するとドアは開き、そこには緑豊かな景色が広がっていた。

それでいて、生徒と思われる人で溢れていた。黒髪もいれば金髪、茶髪、紫髪やピンク髪の人もいた。どうやら、国も違うらしい。

なんという世界に来てしまったんだ、と少年は驚いた。そこにある物、人、何もかもが新鮮だった。

そして人々が向かって行く方向には大きな城のような建物がある。

「あれが学校よ」

その女性が指を指していたのは、まぎれもなく城だった。

「あれが……学校？」

今まで見てきた学校という概念を壊された。庭もとても広く、門から芝生が広がっていて、中央には噴水がある。

よく見ると、奥の方にはプール、広場など高級なホテルを思い出すいや、いくら高級なホテルでもここまでは凄くないだろう。

門へ入ると先生らしき人が立っていた。どうやら道案内をしているらしい。確かに何も無しで入れと言われても迷うだけだろう。

そうして俺達は講堂へと案内された。

その場にはざつと500人くらいの生徒がいる。その半分くらいの生徒が高貴な感じがした。

パンパンと手打ちの音が鳴り響くと、一瞬にしてざわめきが止んだ。「私が校長のカナル・ド・フランベールだ。これからクラス発表を行う。その後にはクラスで分かれて、ペアを決めてくれたまえ。それではクラス発表を行う」

そう言うのとフランベール校長はクラスを発表し始めた。

全部で3組あるらしい。どうやら俺はB組のようだ。

発表が終わると、学校の事を説明しだした。その説明でいくつかの事が分かった。

この学校には別館があり、生徒はそこで泊まるという事。

ここでは、クラスで決めるペアで相部屋となるという事。

授業もペアで座り、成績にもペアが関係してくるという事。

とにかくこの学校では、ペアが凄く重要となってくるとい事が分かった。

そして俺らはそれぞれのクラスに案内された。

学校の中はまるで迷路のようだった。広くて覚えるのも一苦勞だ。クラスに着くと早速ペアが発表された。どうやら、あらかじめ先生の方で決めてあったらしい。

基本的に高貴な人と普通の人の組み合わせとなっていた。

「あの、先生。何でこんな組み合わせなんですか？」

少年が聞くと、周りの空気が一瞬にして冷めたのを彼は感じた。

「君、そんな事も知らずに入ってきたのかね？」

焦りながら少年は答えた。

「あ、あの、ちょっと……記憶を無くしてまして」

無茶苦茶な言い訳だったが、なんとか逃れることができた。

「そうか。もしかしたら方にも理解していない人もいるかもしれないからな。軽く説明しよう。つまり、ペアの組み合わせは魔法使いと戦闘員となっており、男子は男子と、女子は女子と組むようになっている」

魔法使い？何の話だ。コイツは映画の見すぎなのではないだろうか。

「分かったか？それではペアを発表する」

正直何も分からなかったが、また余計な事を聞くとややこしくなりそうだったので、止めたのは言うまでもないだろう。

そうしてペアを発表し始めた。次々と決まっていく中、少年の名前はなかなか呼ばれない。

そして最後に呼ばれたのが少年の名前だった。

おかしい事に、その相手は女の子だったのだ。

その子は茶色くふわふわした長い髪の毛で、背は小さく、なんとも可愛い子だった。

もちろんその子が納得いくはずがない。小さな少女は口を尖らせて先生に言った。

「先生！なんで私だけこんな男とペアなんですか？納得できません」

先生は冷静に答えた。

「力の差を埋めるためだ。君はかなり優秀だからな。それに比べて彼は普通の戦闘員以下だ」

少年はちよつと頭にきて文句を言おうとしたが、それより早く彼女の口が開いていた。

「それにしたつて女性は女性同士なんじゃないんですか？」  
と言いつめ寄る。

「どこかのペアがこうならなければ、ならなかったのだから仕方がないだろ。諦めるんだ。それとも退学になりたいのか？」

先生は彼女に冷たく告げる。

「そんな……」と呟きながら彼女の表情がくもる。

そんなに嫌なのだろうか、と思うと悲しくなってきた。

はあ、とため息をついていると少女が少年を睨みつけてきた。少年は一瞬だったが、背筋に冷たいものを感じた。

「では各自、自分の部屋に戻るように。明日は8時から朝食だ」  
そう告げると先生は教室から出ていった。

とりあえず部屋に行くことにした。

幸いにも鍵は俺が持っていたのだ。部屋に入ろうとした瞬間だった。

「ちよつと、私より早く入るつもり？」

と後ろから声が聞こえた。

もちろんさっきの少女だ。

「レディーファーストって言葉を知らない訳？これだから馬鹿は嫌なのよ」

そう言われては少年も黙っているわけにはいかなかった。

「何だよ。そんなにお前は凄いのか？どう見たってチビでアホな女じゃねえか」

それを聞いた少女は

「な、な、な、何ですって？私に向かってそんなことを言うだなんて侮辱だわ。ええ、侮辱に違いないわ」



少年は偉そうに言った。

「あいにくお前のことは何も知らないんでね」と。

プルプルと震えている少女は少年に向かって杖を振った。  
すると少年の体が動かなくなったのである。

「少し礼儀というものを教えてあげなきゃならないようね」  
と言うと少女は杖を上には振り上げた。

少年の体は宙に舞い、天井へぶつかった。

少年は理解することができない。それどころか、今自分に何が起きているのかさえ理解できていないのだ。

「これが魔法の力よ」

と勝ち誇ったように言った。

全く分からなかったが、これ以上逆らうの危険だと感じ、少年は謝った。

その夜、風呂に入る時、着替える時などの度に、少年は部屋の外に出された。しまいには、寝る前に

「襲ってきたら殺すから。近寄らないでよね」

とまで言われてしまった。少年は肩を落としてつつ寝ることにした。

少年の寝るベットは固く、狭かった。それに比べて少女のベットはふかふかしていて、大きい。

どうやらベットまで魔法使いと戦闘員の違いがあるらしい。

何て世界に来てしまったんだ、と心から少年は思った。

## 1章 旅立ち

翌朝、いきなり事件は起きた。

朝早くに起きた少年は寝ボケた状態で辺りを見回す。自分が置かれた状況を理解するまでに数分掛った。

思い出したのか、少年は朝食に遅れないために、まだ御姫様のように眠っている少女を起こすことにした。

「おい、起きろ。朝飯だぞ」

布団をどかすと、少女はキャミソール一枚だった。少年がびっくりして後ろに尻餅をついていると少女が起きた。

「へ、へ、ヘンターイー！」

少女はそう叫ぶなり杖を振る。少年は何か言い訳をしようとしていたが、当然聞いてもらえず凄まじい風圧に押し飛ばされ、壁に激突した。

一瞬少年の意識が無くなる。

「イテテ……」と少年が目を覚ますと目の前には顔を真っ赤にして杖を少年につき付けている少女の姿あった。

「あんた何してんのよ」

相当怒っているようだ。綺麗な眉がピクピクと動いている。

「いや、あの、もうそろそろ朝食なので起こして差し上げようかと

……」

少年は思わず敬語になってしまう。

後退りをしようとしたが、後がない。少女はまだ少し怒っているようだだったが、

「まあいいわ。次からは気を付けて」

と言って少年を外に追い出した。

「着替えるから」

と一言言つとドアを閉めて鍵を掛けた。

少年はドアにもたれて胸をなで下ろした。

本当に身の危険を感じたのだ。何て危険な奴だと頭を抱えているとドアが開いた。

「早く着替なさいよ。行くわよ」

と少女が言う。何て酷いんだ、と思いつつ

「はい」

と答える少年だった。

直ぐに準備をし終わると、ドアに鍵を掛けて少女の後を追いつける。もちろん雑用は少年の係だった。

長い階段を下り食堂へ行くと、とても豪華な物が並んでいた。

少年にとっては驚くことだったが、少女はそうではないらしい。

少女はそんなことを気にせずに普通に席に座った。

しかし、よく見ると少年と少女の席で並んでいる物が違った。

少女の方はスープや何やらとたくさんあったが、少年にはスープとパンしかなかった。それを見た少女は

「あなたの家って貧乏なのね」

と感心したように言った。

「どうせこれが魔法使いと戦闘員の差ですよ」

と少年はふてくされたように言った。すると少女は不思議そうに言った。

「別に魔法使いとか戦闘員の問題じゃないわ。その家にお金があるか、無いかの違いよ」

そう言いながら少女は周りを指差す。

よく見てみると、こんなに酷い朝食は少年だけだった。

「どういう事だよ」

少年は少女に聞いた。少女は呆れた顔で少年に言う。

「いい？学校の授業料や食事費はお金が掛るの。だから払うお金の量でグレードが決まってくるの。それだけ言えばいくらあなたでも分かるでしょ」

確かにこの世界に来てからここまで理解できる事は無かった。

成程、成程と少年は今までの事を思い出した。

だからベツトに差があったのか、とか食事にも差がでるんだな、と得意気に頷いていると、食事が始まった。

少年は直ぐに食べ終わってしまった。

もちろん、お腹一杯になるはずがない。隣にはとても豪勢な物が並んでいる。

たまらず少年が

「なあ、こんなに食べきれるのか？残すなら俺が食べてあげるよ」と調子に乗って言う。

「無礼者ね。口をつつみなさい。あなたにあげるくらいだったら、ペツトにあげた方がましだわ」

そう言いながら少女は胸ポケットに入っている杖を取り出して少年に向けた。

「はい。すみませんでした」

と少年は直ぐに謝る。

そうして少年は深いため息と共に肩を落とした。

そんな時だった。

隣の席からなんとも可愛らしい声が聞こえる。

「あの、よろしかったら私のをどうぞ」

その声の主は髪の毛が桃色で、童顔だった。それでもってとても可愛い。

普通に見ても可愛いのに、今の少年にとってはこの世では有り得ないほどの輝きを放っていた。

「どうせ食べきれないですから」

微笑みながら言う。

「ほ、本当にいいんですか？」

「ええ」

短い会話だったが、少年にとっては凄く感動のすることだった。隣に座っている少女を横目で見るが、別に気にしてはいないようだ

った。

「では遠慮なく」と少年は頂くことにした。

その味は今まで食べたことのないくらい美味しかった。

感動しながら食べていると、食事の時間が終わってしまった。

少年は面識も無かった美少女にお礼を言々と席を立った。

そして授業へ向かうことにした。

言うまでもないが、席の隣にはペアである少女が座っている。

そしてチャイムが鳴ると同時に先生が教室に入ってきた。

「それでは授業を始める。この学校の目的は知ってる通り、戦うの強化することだ。であるから、今日は戦い方についての授業を行う」

少年は初めてこの学校の目的を知った。

しかし勿論、少年は戦ったことなどない。

「いいか。戦闘のスタイルは大きく分けて3つある。1つは戦闘員が戦い、魔法使いが補助をするスタイルだ。これが最も多いスタイルだろう」

やりたくないスタイルだな、と少年は思いながら聞く。

「次に多いのは魔法使いが戦い、戦闘員が補助をするスタイルだ。

これは戦闘員が遠距離系の武器を得意とする場合に使われる戦法だ」これは安全で良いかな、と少年は思い浮かべる。

「まれにあるのが、両方突っ込むスタイルだ。確かに破壊力はあるがリスクが大きいため、あまり使われていないのだ。それに個々の能力が大きく左右をしてくる」

ふーん、と関係のないような顔で聞いていた少年だったが、隣にいる少女はそうでもなかったらしい。

「何悩んでるんだよ？」

ため息をつきながら少女は呟く。

「ペアがあなただからよ。これからのことが心配になったの」

「別に大丈夫だろ。お前がいるんだし」

そう言う少年は椅子に大きくもたれた。

「だったら死ぬ覚悟で突っ込みなさいよね。私あなたの事を援護してる暇はないから」その言葉に思わず少年は体を起こした。

「え、まさか俺らの戦法って…」

「そうよ。最後のスタイル、二人とも戦うやつよ」

一瞬少年の額に汗が滲んだ。

少年にとっては一番ありえない戦法だからだ。それに少年にそんな戦闘能力はない。むしろ普通の戦闘員の足元にも及ばないだろう。

「おい、本気か？多分ソッコーで負ける。ってか死ぬ」

「別に私は負けないもん」

「自分だけかよ。お前やつぱり性格悪いな」

そう言った瞬間だった。少女の手がグーで少年の顔に襲いかかってきた。

少年は見事に当たり、顔を押しえ込んだ。

「ほら、そこ大丈夫か？」

「大丈夫です」と少女が微笑んで答える。少年は未だに顔を押しえていた。

「ほら、しっかりしなさいよ」

「お前が殴ったんだろぅが」

少年はまた殴られた。

「各ペアで話し合って決めるように。それでは戦闘訓練に入る。魔法使いと戦闘員でわかるように」

言われたので、少年と少女はわかれた。

やはり魔法使いと戦闘員では訓練の仕方が違うらしい。

魔法使いはその場に残され、戦闘員は外に出された。

魔法使いは当然ながら魔法の練習をする。

それぞれのレベルに合った練習内容の書いてあるカードが配られた。その中でも少女の練習内容は人一倍辛いものだった。

逆を言えば、それだけ他の人との差があるということだ。しかし、当の本人はそんな事も気にせずに軽々とこなす。

「ほお……」と先生を驚かせる程だった。

それに比べ、戦闘員である少年は見られない程の弱さだった。素手でやっても、ともにサンドバックすら叩けない。

だからといって剣を持たせても、重くて振ることすら出来ない。たまたまあつた30センチくらいの小刀がやつとだった。

戦闘員は普通なら初めの授業で武器を決めるのだが、彼に合うものは無かった。とりあえず先生から小刀を受け取ったが、しっくりくるはずがない。

他の武器も試してみたが、小刀よりも酷かった。

そこで少年は先生に提案をした。

「先生、俺も魔法使いになりたいのですが…」

「馬鹿を言つな。一生かかって無理だ」

「では飛び道具を使うというのは？」

「もう試してみただろ。どれも駄目だったじゃないか」

確かに少年は飛び道具も試していた。

ブーメラン、手榴弾、弓、全て試したが駄目だった。

飛び道具について少年が考えているとある物を思い出した。

「先生、まだ拳銃を試してないですよ」

「ケンジユウ？何だそれは。からかうなら止めてくれ」

少年はこの世界には拳銃が存在しないということを悟った。

そして落ち込んだ。

実は少年は拳銃には自信があつたのだ。しかし、それが無いと聞いて少年に大きな脱力感を感じさせた。

そんな少年など気にせずに訓練は昼まで続いた。

昼になると地獄のような訓練は終わり、昼食となった。

少年は食堂に戻ったが朝の元気は無い。

「どうしたのよ？」

と少女が話しかけるが、「あゝ」とか「死ぬゝ」とか呟いているだけだった。

素朴な昼食を食べ終ると、午後の訓練が待っていた。訓練と言って

もペアの練習だった。

これから先、ペアのコンビネーションが重要となってくるからとのことだ。

「それじゃあ始めるわよ」

と少女が言うが少年は乗り気ではないらしい。

「ちよつとくらい休ませてくれよ」

「ダメ」

即答。頼んでから0.1秒あったかないかで答えられた。

「ほら立ちなさい」

そういつて少女が杖を振ると少年は浮き上がった。

「うわ、ちよ、ちよつと待って」

「じゃあ早く立って」

少年はしぶしぶと立ち上がった。

「で、何するの？」

「特訓に決まってるじゃない」

「特訓？誰の？」

「あなたでしょ。あなた相当弱いみたいだから、私が特訓してあげるって言うてるのよ。早くかかってきなさい」

少年はちよつと頭にきた。いくら魔法使いだと言っても女の子だ。さすがに女の子には負ける気がしなかった。

「どうやって戦うんだよ」

「そうね。これを使いなさい」

そう言うのと少女は太い木の枝を少年に投げ渡した。

「泣いても知らないぜ」

と妙な笑みを浮かべると少年は少女に向かって走りだす。

「おりゃあああ！」

少年が大きく振りかかると、少女はいとも簡単にかわして少年の腹に蹴りをいれる。少年は吹き飛ばされ倒れる。

「なにそれ。本当に本気でやってるの？話し相手にもならないわ」と少年を見下す。



少年は悔しくて何度も挑んだが一度も勝てなかった。  
そうして一度も勝てない訓練は夕食になるまで続いた。

夕食の時には少年はボロボロだった。そして信じられない程の疲れが少年を襲っていた。

「やばい、眠い」

少年はどこだろうと眠れる自信があった。

試しに食堂で寝ようとしたが、少女に足を踏まれて起こされた。

そして少年にとってはどちらでもよかった夕食も終わり、部屋に戻るようになった。

やっと眠れる、と思った少年だったがそうはいかない。

少女が着替えたり、風呂に入っている時は部屋には入っていけない。仕方なく壁に寄りかかって待っていたが、知らない内に少年は寝てしまっていた。

「入って良いわよ」

と少女が言うが反応がない。

ちよつと気になった少女がドアを開けると、少年が壁に寄りかかって寝ているのに気が付いた。

「まったく」

とため息をつく。

それから少女は少年を蹴って起こした。

目を覚ました少年に

「みつともないから、そんな所で寝ないで。それに風邪でも引かれたらこつちが迷惑なんだからね」

と言うと先に部屋に入って行った。

少年も少女につられて部屋に入る。優しいんだかよく分からない奴だな、と思った。

風呂から出ると、少女はベットの中にいた。

まだ眠っていなかったようなので、少年は気になっていた事を聞く。

「そついえば、名前は？」

「……椿。鈴道 椿よ」

「…椿か」と少年が小さく呟く。

「どこの国の生まれなの？」と少年が聞いた。

「ずっと東の国」と答えただけだった。

「ふーん。あ、俺の名前は……」

言おうとした瞬間だった。彼女の寝息が聞こえてきたので、また今度言うことにした。

それから3日後。

あれから毎日地獄のような日々を過ごしてきた少年は、自然と筋肉が着いてきて、少し強くなっていた。

しかし肉体は限界を迎えていた。

いつも通り午前中の訓練をしている時だった。少年は急に意識が朦朧としてきた。

「あ……マズ……」

少年は保健室に運ばれた。気が付いた時にはベットの上にいた。

よく考えたら保健室に入るのはこれが初めてだった。

先生は若い女の人で、メガネを掛けていて、金髪でなんとも綺麗な人だった。

「あ、起きたの？」

そう言うとき椅子から立ち上がって、側に来る。

「大丈夫？ずいぶん無理してたようね。体中筋肉痛だし、傷も少しあるし」

確かにかなり無理をしていた。体中痛かったし、出来れば寝ていたくらいだったのだ。

「大丈夫です………多分」

「そう。でも今日くらいは寝ておきな」

先生は少年に布団をかけてあげると、（少年の気のせいかもしれないが）先生は少年に微笑んでから自分の机に戻った。

まるで天使のような人だ、と思いながら少年が見ていると先生が振り返った。

「どうしたの？」

「い、いえ何でもないです、はい」

どうやら少年の視線が相当気持悪かったらしい。

確かに、惚れたような変な顔をしながら見ていたのだ。

少年はわざと先生の方を見ないように壁に向き直した。

そんな中、椿は食堂にいた。

席に座った時にちよつとした変化に気が付く。

（あれ？あのバカはどこに行ったのかしら）

不思議に思っていると、隣の席に座っていた戦闘員が「保健室に運ばれたよ」と教えてくれた。

「まったく、何やってるのかしら。あのバカ」

そう呟きながらも少し気になっていたのが本音だった。

たかが3日だが、午前中の訓練以外は一緒にいるのだから、少しは少年の存在が大きくなっていたのだ。

午後の訓練はペア同士なので椿は暇になった。

始めの内は一人で魔法の練習などをしていたが、どうも集中できない。

「あゝゝ」とか「もゝゝ」などと言っていたが、1時間くらいすると椿は訓練をやめてしまった。

しばらくの間、地面に座りながら空を見て何か考えていたようだが、少し経つと急に立ち上がりある場所に行った。

そこで何か飲み物を買うつ、保健室に向かった。

保健室に入ると沢山のベットがある中、少年は一番手前のベットに寝ていた。

椿が入って来たことに気が付いた少年は笑いながら言う。

「お、心配して来てくれたのか？」

「バカね。そんな訳ないじゃない。ただ暇だったから来ただけ」  
椿は答えると少年に「はい」と買ってきた飲み物を渡した。

「何これ？」

「いいから飲みなさい」

怪しい思いながらも、せっかく貰ったので少年は飲んでみた。

「ぐは……何だこれ。苦すぎ」

「たまたま売ってたから買ってきてあげたのよ。いいから残さず飲みなさいよね」

「もう少しおいしい物を買ってこいよ」

「買ってきただけ有り難いと思いなさいよ。魔法使いである私が戦闘員に買ってきてあげたんだから」

椿はフンつと横を向いて言った。

「だいたいなあ……」

と少年が椿に文句を言おうとすると、用事があってこの場にいなかった保健室の先生が戻ってきた。

「あら、それマハナジュースじゃない」

先生が言っていると椿はドキつとした。少年が先生に

「マハナジュースって何ですか？」

と尋ねると先生は答える。

「マハナジュースっていうのはね、マハナっていう魔法の草から作られたジュースなの。マハナには疲れを癒したり、治るのを早める効果があるわ。でも残念なことに、結構高いのよ。お金大丈夫だった？」

少年は便利な物があるもんだな、と聞いていた。しかし、重要なことに気が付いた。そう、このジュースは少年が自分で買った物ではないのだ。すぐに椿の方を向いて「そうなのか？」と顔の表情で尋ねた。

椿は急にそわそわしだして、ちよつと頬を赤らめながら先生に

「そ、そうなんですか？ 知らかったです。あ、あの、もう私訓練し

ないといけないので戻ります」

そう言いきる前に椿はドアの外に走って出ていった。

「へえ、良い子じゃない。あなたの事心配してくれてたのね」

そう言う先生はニヤニヤしながら少年の方を向く。

「付き合ってるの？」

と先生が聞いてくる。少年は慌てて

「い、いや、そんなわけじゃないですか」

と弁解をする。

「あいつが俺のことを好きになる理由がないですよ。俺そんなに格好良くないですし、それに弱いし」

「ふーん。あなたってそんなに弱いのか？」

「ええ、そりゃあもう。普通の戦闘員の足元にも及ばないですよ。せめて拳銃があれば……」

先生が不思議な顔をする。少年はこの世界にはなかった事を思い出した。

「ケンジュウって？」

「ああ、拳銃って飛び道具のことです。玉を詰めて飛ばして戦うんですよ」

「それってもしかして……ハリカナの事？」

「ハリカナ？」

「そうよ」と言って先生は絵に描いて説明してくれた。性能は多少違ったが、それは間違いなく拳銃だった。少年は思わず立ち上がった。手に入れられたら絶対に強くなる自信があつたからだ。

「先生！何でそれを知っているんですか？」

「何でって、先生の故郷だからよ。ここからずっと南にあるナントラという国よ。そこに売ってると思うけど……」

「先生、俺にそのナントラという国への行き方を教えて下さい」

「スポットを使えば直ぐに行けるけど……学校はどうするの？」

少年はすっかり忘れていた。この学校は普段休むことが許されていない。抜け出そうかと考えたが、多少そんなことをしたら一生戻っ

てこれなくなるだろう。

「先生、何か良い方法はないですか？」

「ん……そうだ！じゃあ私の助手になるっていうのは？」

先生が笑いながら言う。

「助手……ですか？」

「そう。そうすれば用があるから、って言えば一緒に外に行けるかもしれないわ」

少年はとにかくナントラに行きたかったのであっさりと承諾をした。  
「お願いします。どうしても行きたいので」

「わかったわ。じゃあ校長先生に聞いておくわ」

と先生は少年にウイंकをしながら言う。その時の先生は誰もが見とれてしまうしもう程だった。

「じゃあまた明日来てね」

「わかりました」と言って少年が保健室から出ようとした時だった。

「あ、君……名前は？」

と言われたの少年は困った。この世界での名前があったが何か違う気がしたのだ。しかし、よく思い出せない。

「俺の名前は何だ。どこから来て、何でこの世界にいるんだ」と呟く。

少年はこの世界に来てから過去の記憶を無くしかけていた。

先生が不思議そうな顔をしていたので、とりあえずこの世界での名前を言った。

「ガルド・バリエスです」

「わかったわ。じゃあまた明日ね」

先生は微笑みながら手を振ってくれた。

保健室を出たガルドは食堂へ向かった。ちょっと戸惑ったが椿の隣に座る。

ジューズのこともあったので、なかなか話が切り出せずにいた。どうやら椿もそうらしい。そのせいか、一度もガルドのことを見ようとしていない。そんな状況がずっと続いていると、夕食が終わっていた。

部屋に戻ると、相変わらずガルドは部屋の外で待機。慣れのせい、あまり気にならなくなっていた。

待っていると「いいわよ」と声が聞こえてくる。部屋に入ると、いつもとは違ってベットの中にはいなかった。鏡に向かって髪をとかしていたのだ。ちょっとびびくりしたガルドだったが、気にしないフリをして風呂に入った。

風呂から出てくると椿はベットの中だった。ガルドは自分のベットの中に入ると、勇気を出して口を開いた。

「椿、あの、………ありがとな。嬉しかった。俺、もっと強くなるからさ、これから頼むよ」

言いきった。椿の反応を待っていたが何もない。冷静になってみると椿の寝息が聞こえた。

「空回りかよ」と思わず呟いてしまった。それからガルドは眠りについた。

しかし、まだ寝ていなかった人がいた。そう、椿だ。実は寝ていたフリをしていたのだ。正直どう対応すれば良いのかわからなかったので、寝たフリをしていた。

「なによ。いきなり言い出して。あんなこと言われたって何言ええ良いか分かるわけないじゃない」

しばらく文句を言っていた椿だったが、気が付かない内に眠ってしまっていた。

その頃、保健室の先生は校長室にいた。

「どうしたんだね？急に助手にしたい生徒がいるだなんて、君らしくない」

「ええ、少し面白い子でして」

「ほお。…というと？」

校長先生が目を細める。

「名前が気になりました。出身地からしても間違いないと思います。それでちよつと彼に賭けてみたくなりましたね」

先生が不気味な笑みを浮かべる。

「……名前は？」

「ガルド・バリエスという少年です」

「バリエス……まさか…あのバリエス一族の生き残りか？」

「恐らく」

校長先生は笑った。

「なんという事じゃ。まさかあのバリエス一族の生き残りがいたとはな。相当の者になりそうじゃな」

「そうですね。しかし、彼のあまりの弱さに他の先生は気が付いてない様です」

「まあ、しょうがないじゃろう。わしも偶然だと思っていた程じゃ。それで彼が力を発揮するには武器が必要だと？」

「そのようです。昔から1つの武器に優れていた、という言い伝えもありますからね」

「そうじゃな。では特別彼を助手として認めよう」

「ありがとうございます」

そう言つと保健室の先生は校長室を出ていった。

「面白くなりそうじゃな」と校長先生が一人で呟く。

次の日、ガルドは約束通り保健室へ向かった。もちろん椿も一緒である。

午前中の訓練を休む訳にはいかなないので、椿に説明をして午後を休みにしてもらったのだ。

椿は意外にも「ふーん」と言つと休みにしてくれた。

保健室に着くと「待ってました」と言わんばかりに、先生が嬉しそうに待っていた。



「学校休んでも大丈夫だって」

「本当ですか!？」

思わず声が大きくなる。

「本当よ。いつ頃出発する?」

「いつでも良いですけど……」

「じゃあ明日出発しましょ。早い方が特なもの。じゃあ明日の朝食終わったら校門で集合ね」

「わかりました」

話もそろそろ終わりに近付いた時だった、今まで気持ち悪いくらい静かだった椿が口を開いた。

「ちよつと待つて。私はどうするの? 午後の練習出来なくなるし、困るんだけど」

全くその事を考えていなかった。

確かに、ガルドがいなくなってしまうえば椿はペア練習が出来なくなる。

「それに武器を買うお金があるわけ?」

「う……」と思わず身を退いた。もちろんそんな金があるわけが無い。

困っていると先生が口を挟んだ。

「その事は心配しなくていいわよ。私が出してあげるから」

ガルドは思わず先生の方を向いた。

「安いし、彼のためだったら出してあげるわ」

先生はガルドに向かってウイंकをした。

もちろんそんな理由のはずがない。ただ、ガルドが戦闘員としての素晴らしい血族だからだ。

しかし、まだ確実では無かったし、他人にも言わないことにしてあったので嘘をついていた。

だが、その事を知るはずもない彼らは状況を理解していなかった。ガルドは「え?」と言うだけだったし、椿は言葉も出なかった。

冗談で言っただつもりだったが、通じていなかった様なので先生は言

い直した。

「なんてね。本当は彼に期待してるのよ」

「……期待…ですか」

「ちよつと珍しい子だと思ってね」

彼らにはよく分かつていなかったが、あまり突っ込まないことにした。

「じゃ、じゃあ行くお金はあるわけ？泊まりにもなるだろうし」

再び椿が言い出す。

「それも私が払うわ。今回は私のおごり。それに校長先生からも少しお金を貰っているの」

そう言つと封筒をヒラヒラとさせて見せた。

何で校長先生までもお金を出しているんだ、とガルドは思った。何だかよくわからなくなってきたぞ、と頭をかいた。

「それじゃあまた明日ね。先生準備で今から出かけなきゃいけないから、行くね」

先生は出ていってしまった。

しばらくボ～としていたガルドだったが、この部屋にもう一人いることに気が付いた。

急いで振り返つてみると凄く不機嫌そうな椿がいた。

「なによあの女。あんた達何かあったわけ？」

ガルドは首を大きく横に振る。

「ふ～ん。でもやけに仲が良いみたいね」

椿が睨む。ガルドは仲が良いと思つたことがなかった。

「別にあの時しか話したことねえよ。それに仲良くなったつもりはないし。でもお金出してくれるって言つてるんだから助かるな」

ガルドは染々（しみじみ）と言つた。

「ふん。好きにすればいいじゃない」

椿は保健室を出ていってしまった。

どうやら機嫌が悪いらしい。

遠くから「早く練習するわよ」と怒鳴っている声が聞こえた。

ガルドが急いで行くと椿はもう構えていた。

「始めるわよ」

と一言いうといきなり杖を抜いて呪文を唱えだす。

「げ……」

気が付いた時にはガルドは風圧によって吹き飛ばされていた。

これまでに無かった程本気だったので、ガルドは焦った。

「ちよつと待てよ」

と叫んでみたものの「やだ」の一言で返されてしまった。

その後も容赦なく攻撃され、夕食になる頃には傷だらけだった。

左足を引きずりながら食堂に向かい、夕食に手をつける。

その後は即効で部屋に戻り寝ることにした。

次の日。朝起きると椿の姿はなかった。どうやら先に行ってしまったらしい。

「まだ怒ってんのかよ」

ガルドは呟くと荷物を持って食堂に向う。

食堂に行く途中、昨日の痛みがまだ残っていることに気が付いた。痛むな、と思いながらも足を運ぶ。食堂に着くと椿は座っていた。

「何で先に行ってたんだよ」

「別にあんたのことを待つ必要なんか無いでしょ」

そう言うつと椿は下を向いてしまった。

その後も会話も無いまま朝食は終わってしまった。

食堂を出る時に一言いっておこうとガルドは椿を呼んだ。

「じゃあ俺行くから」

椿は一瞬ちよつと戸惑った顔をしたが、さらつと言った。

「分かっているわよ。早く行きなさいよ」

そう言われてガルドが行こうとすると後から声が聞えた。

「早く帰って来なさいよね」

それは小鳥が鳴くような小さく、弱々しい声だった。

振り向くと、そこには唇を噛み締めて下を向いている椿がいた。

「……椿？」

急に椿が小さく、女の子らしく見えた。

「迷惑なんだから、もう。少しは考えなさいよね。暇になっちゃうし、練習は出来なくなっちゃうし……」

ガルドは思わず椿のことを抱き締めてしまった。

「悪い、でもすぐに帰ってくるから。もっと強くなって、お前を守れるようになるから。だからちよっと待っていてくれ」

言い終わった時だった。

はっと我に返ったガルドは急いで離れが、既に遅かった。

椿はもう杖を持っていたのだ。

「別にあんたに守ってもらわなくて大丈夫だから」

「全くその通りでございます」

椿が杖を大きく振るとガルドは遠くまで吹っ飛んだ。

「い、行つてきまーす」

ガルドは全力で走って待ち合わせ場所に向った。

それを見届けた椿は杖をしまった。

「何よ、いきなり抱きついてきて。ちよっとビックリしたじゃない」

椿は自分の鼓動が早くなっているのを感じた。

「ビックリしただけよ」

と自分に説得するように言うと、なんとなく恥かしくなったので、走って教室に向った。

その頃ガルドは待ち合わせ場所に着いていた。

先生が門に寄り掛かって待っていた。

「遅れてすみません。」

「大丈夫だよ。それじゃ行こうか」

先生は歩き出す。慌ててガルドも後を追う。

少し振り返って、何かを誓うようにしてまた歩き出した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3513d/>

---

静かなる伝説

2011年1月25日03時05分発行